

カンボジアの言語環境

岡山県カンボジアビジネスサポートデスク (I-GLOCAL)

はじめに

2014年現在、カンボジアでは人口の90%以上がクメール人であり、残り10%を中国人・ベトナム人のほか少数民族が占めている^(*)。公用語はクメール語であるため、カンボジア全土ではクメール語が広く用いられているが、プノンペンやシェムリアップなどの都市部では比較的英語が通じる。また、商店やレストランの看板でも英語や中国語での併記が多く見られる。隣国のベトナムでは、街中で英語が通じるケースが稀であるが、カンボジアでは母国語であるクメール語に加えて、英語をはじめとする外国語を話せる人々が多いため、今回はその背景について考察したい。

1. クメール語に関して

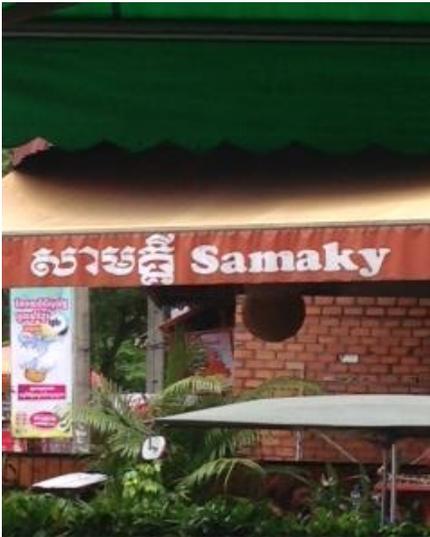
まず、クメール語に関して簡単に紹介したい。クメール文化は南インドの影響を強く受けており、言語・文字ともに南インドが発祥であるといわれている。東南アジアの文字の中では最も古い部類のひとつであり、タイ文字やラオス文字もクメール文字由来のため、クメール文字とタイ文字はよく似ている。

អក្ខរក្រមខេមរភាសា (クメール語)

ภาษาไทย (タイ語)

上記のサンプルはそれぞれクメール語・タイ語で「クメール語」・「タイ語」と記載している。言語自体は声調がないため、比較的学びやすいが、文字はこのように非常に複雑な形態をしているため、外国人がクメール語を筆記するのは非常に難しい。また上記のような言語を記載することは非常に手間がかかるため、普段クメール人が文字を書くときにはチュリオン体と呼ばれる筆記体が用いられる。

2. 都市部・観光地における英語とクメール語



この写真はプノンペン市内のレストランののれんであるが、クメール語と英語が併記されている。完全にクメール人向けの食堂などを除いて、プノンペンやシェムリアップなどの都市部および観光地では、看板は英語併記が一般的である。

外国人が観光のためにカンボジアを訪れ、消費する金額は非常に大きく、ツアーやホテルなど、直接的な観光業は2012年でGDP全体の11.5%を占め、その他観光に関わる間接的な産業を含めると25.8%を占めている。またカンボジアにおける職業従事者の22.3%が観光業に従事している^{(*)2}。GDPにおける観光業の割合はASEAN諸国の中でも突出しており、観光収入はカンボジア経済およびカンボジア人の生活にとって欠かせないものということがわかる。

そのため、レストラン従業員、タクシードライバー、ホテルのレセプションはもとより、パパママショップ（家族経営または小規模小売店）の店員まで、簡単な英語であればあらゆる場所で使うことが出来る。

3. カンボジアの識字率と言語環境

カンボジア人の識字率は全体で73.9%と世界平均84.1%と比較しても低水準である^{(*)3}。これは過去にクメールルージュによって教育が禁止されたせいもあり、特に50歳以上の識字率は20%前後と非常に低いことに起因している。

※クメールルージュ……《赤いクメール（カンボジア人）の意》カンボジアの反政府組織。特に、ポル＝ポトを中心とする共産ゲリラ組織。1976年民主カンボジア政府を発足、反対派を大量虐殺する極端な共産主義革命を行った。ポル＝ポト死去後は衰微、消滅。

なお、若年層ではほとんどのクメール人がクメール文字の読み書きを行うことができる。しかしながら、近年急激に進歩しているパソコンやスマートフォンなどのIT機器ではクメール語への対応が遅れており、一流大学を卒業していても、パソコンでクメール文字を打つ

ことが出来ない若者も多い。クメール語での入力に関してはパソコン学校へ通うケースが一般的である。

Windows Vista 以降、マイクロソフトもクメール文字フォントを搭載しているが、クメール文字の表示は読みにくいため、利用は敬遠されるケースが多いようである。最近では Unicode（日本語の仮名打ちに相当）が浸透してきており、入力は比較的容易になったが、以前は Limon という入力ソフトを使って入力を行うことが一般的であった。現在でも一定のシェアを持っている Limon であるが、クメール語は文字数が多いため、ある文字を打つ場合は Shift+Ctrl+Space+文字で入力する必要があるなど、非常に複雑である^(*)。

また最新の iPhone や Samsung など一部のスマートフォンではクメール文字に対応しているが、その他の携帯端末では依然としてクメール文字に対応しておらず、大学生などの若者が友人などとメールやチャットを行う場合は、英語でやり取りを行うケースが多い。つまり、友人等とコミュニケーションを取ろうとする際、双方で英語が話せなければメッセージでのコミュニケーションが難しいという問題が生じている。一部の若者の間では、たとえば日本語では「nihongo」のように音をアルファベットに置き換えて入力を行うなどの試みが行われているようであるが、入力が煩雑になり分かり辛いため、利用は限定的である。

4. 外資系企業の存在と日本語人材

近年高度成長を遂げているカンボジア経済であるが、依然として主要産業は観光業や農業である。また、外資系企業の存在が目立ち、英語を話せなければ外資系企業で働くことが出来ずに良い職に就くことが出来ないといった状態となっている。中等教育以降、学校の授業でネイティブスピーカーが英語を教えるケースが多いが、それだけではビジネスレベルに達しないため、自ら英語の塾へ通うケースが多い。



(王立プノンペン大学の日本語学科の授業風景)

また近年は日系企業の進出が増加しており、日本語を話せる人材が不足している。カンボジアの一部の大学では日本語学科があり、日本語教育が行われているが、日本語学科を卒業する生徒は年間で合計 100 人程度であり、その中で「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」と評価されている日本語能力試験 3 級レベルの生徒はほんの一握りである。

岡山県カンボジアビジネスサポートデスクレポート

こうした状況から、日本語人材の給与水準は高騰しており、近年日本語を学習する生徒が増加している。日本語を専門的に学習する私塾が都市部では増えており、生徒数も増加しているとのことである。また、カンボジア最高峰の大学である王立プノンペン大学では、3年前まで日本語学科への入学者が80人程度（卒業は半分程度）であったのに対し、昨年の入学者は倍以上の180人程度と大幅に増加している。そのため、徐々に需給の不一致が解消されることが見込まれる。

まとめ

上記を簡潔にまとめると、以下のとおりである。

1. 観光収入が重要な収入源であることから、外国人とのコミュニケーションのために英語を学習するクメール人が多い。
2. IT化が急速に発展し、デバイスがクメール語に追いついていないため、文字コミュニケーションにおいては英語を使う機会が多い。
3. 外資系企業が増加し、給与の高い外資系企業に就職するためにも、外国語を学ぶモチベーションが高い。

その他、子を持つクメール人と話していると、自国を信用しておらず、何かあった場合には国外で生活することを想定して子供にも外国語を学習させるといった内容の話もあった。過去長期間にわたり紛争や内乱を経験したクメール人ならではの意識であると感じさせられた。このように、様々な要因から外国語を学ぶ強い動機があるため、カンボジアでは外国語を話すことが出来るクメール人が多いのではないかと思う。

参照

(*1) The World Factbook (Central Intelligence Agency)

<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/cb.html>

(*2) The World Travel & Tourism Council (WTTC)

http://www.wttc.org/site_media/uploads/downloads/cambodia2013.pdf

(*3) INTERNATIONAL LITERACY DATA (UNESCO)

<http://www.uis.unesco.org/literacy/Pages/data-release-map-2013.aspx>

(*4) クメール語 OS (LoOppaniha)

<http://doni-dog.blogspot.com/2007/06/os.html>